

2013 年度夏期コース報告

秋澤委太郎

1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターでは、40週間の年間コースとは独立して夏期コースが設置されている。本年度は2013年6月20日(木)より8月7日(水)まで実施した。

本年度は、去年実施した「会話テーブル」を資金・人材面等の理由で廃止したが、学生の希望や教員の指示によってインターン学生や助手と自由会話ができる時間を放課後に設けた。

2 夏期コースの目的と特徴

夏期コースも年間コースと同じく、研究者や法曹界、ビジネス界を目指す学生を対象として、日本社会に違和感なく受け入れられる高度な日本語を教育する、という目標を掲げている。学生は大学レベルの機関で既に2年から3年程度の学習を済ませていることが入学の条件であり、本コースが提供しているのはいわゆる中上級以上の日本語教育である。これも年間コースと同様である。

近年は、前途有望な学生でありながら、そして上級日本語の集中的教育を受けることを熱望しているが、様々な事情で年間コースへの入学が困難、あるいは入学を希望しているが決定には至らない、という学生が多い。そこで、そのような潜在的受講志願者に対して幅広く門戸を開き、日本研究センターの教育を経験できる機会を提供していきたいという観点から、夏期コースは年間コースの簡約版とも言うべき内容になっている。

一方で、本コースを年間コースから大きく区別する特徴は、教員構成である。夏期コースでは、年間コースを担当する常勤・非常勤講師に加え、普段はアメリカやヨーロッパで教鞭をとる講師を広く招いている。本年度は、スワスモア大学、デューク大学、カリフォルニア大学ロサンゼルス校から教員の参加を得た。夏期コースは、多様な背景を持つ日本語教員の経験や意識、方法論を共有する場としても機能している。

3 学生の構成とクラス編成

今年度の受講者は45名であった。その内訳は、大学院生(今年度秋学期より入学見込の学生含む)が40名、大学学部生が2名、大学卒業後就職活動中の学生が1名、社会人(企

業に在籍しているが休暇を取ってコースに参加)が1名、大学助教授が1名である。受講者はコース初日の試験で習熟度や得手不得手の傾向を判定され、これに応じて6つのクラスに分けられる。各クラスは1名の担任と、1~2名の授業担当講師が運営した。

夏期コースは年間コースと独立して学生を募集しているが、今年度参加者のうち2名は「サマー・リクワイアド」、つまり年間コースへの参加準備のために夏期コース受講を義務付けられた学生であり、4名は「サマー・レコメンデッド」(年間コースへの参加準備として夏期コース受講を推奨された学生)であった。しかし、サマー・リクワイアド、サマー・レコメンデッドのためだけのクラスを設置することはなく、クラス分けは他の通常受講者との区別なしに初日の試験の成績に基づいて行った。

4 教育活動の詳細

本章では、夏期コースの教育活動についてより詳しく述べる。

4-1 授業・校外学習

授業では、極力生教材を用いた読解ならびに聴解演習、文法、漢字・語彙、待遇表現の練習、そして作文、発表、議論といった運用練習を集中的に行った。また、日本文化と社会をクラスの外で体験できる校外学習の機会も5回設けた。コースの最後には、学んだ日本語を生かし、学生が自分の専門分野等について発表と質疑応答を行う口頭発表会が開催された。本コースは成績を発行していないが、クラスごとに行う中間試験と最終試験によって学生の達成度を判定しており、この結果は学生自身の後学のために活用されている。

毎日の時間割は、50分授業が4コマという構成である。うち3コマを午前9時40分から午後0時30分までの間に行い、1時間の昼休みを挟んで午後1時30分から4コマ目を行なった。校外学習のある日は、午後の授業時間がこれに充てられる。高度に知的な内容を読み、書き、話しそして聞くことができるようにする、そして公の場で社会人として通用する言葉遣いを身につけるという大きな目標は全クラス共通であるが、4コマの授業時間(校外学習を除く)の中で何をどのような順番で行い、教材として何をを用いるかは、主任と協議の上で各クラス担任が主体的に決定している。教育内容はコース開始前に計画されるが、クラスに割り当てられた学生のレベルや学習ストラテジー、あるいは関心の対象が事前の想定と合わないことも多く、そうした場合には予定された読み物をコース期間中に変更するなどの調整が行われる。

校外学習の詳細等、通常授業以外の日程については、末尾の資料を参照されたい。

4-2 授業の実例

本コースは2~3年以上の日本語学習経験を学生の応募条件としていると先に述べたが、

実際に集まってくる学生の能力は多様である。今年の場合、最も下目のクラスには日常会話にさえ苦労し、一般雑誌の記事を1段落読み通すのに数時間を要するような学生が集まり、授業では初級文法の復習と短文レベルの発話練習が不可欠であった。特に、ある学生は動詞の活用もままならず、課外の時間を使って初級文法・会話の「特訓」を行う必要が生じたほどであった。一方、最上級のクラスには研究書を読みこなし、高度な内容のスピーチが流暢に行えるレベルの学生が参加した。授業では現代社会の諸問題に関する資料をはじめ、社会学や人類学の専門書も教材として扱い、活発な討論が行われた。

学生によるスピーチとそれに関するクラス全員での討論、NHK ニュースなどのビデオ素材を用いた聴き取りと内容報告の練習、そして、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター『待遇表現』(The Japan Times)を用いた敬語の訓練は、量や難易度の差こそあれ全クラスで行ったが、それ以外の活動はクラスによって様々である。本節では、筆者が担任した「夏海」クラスの授業の実際を参考までに挙げる。このクラスは本夏期コースで最上級のレベルである。会話の流暢さや語彙力は母語話者に比べて劣るものの、正確な文法で自分の意見を破綻なく話すことができ、書くこともできる学生が集まった。基本的な文法ミスが減らすこと、語彙力と表現力をさらに増強すること、そして、学会発表やパネルで用いられるような丁寧でかたい発話スタイルと、日常会話で用いられるような砕けた発話スタイルを適切に使い分けられるようにすることをクラスの目標とした。

1 時間目 (9:40~10:30)

- ・ミニ発表+討論：1日1人の学生が2分程度のスピーチを準備し、発表後、質疑応答。
- ・ニュース報告：前日にNHK ニュース7を視聴し、1日1人の学生が興味を持ったニュースを報告して意見を述べる。報告は五分程度。ニュースを見てくるのは報告担当者だけでなくクラスの全学生。
- ・言葉の使い方テスト：前日の読解授業(2時間目参照)等で扱った単語や表現、文型の読み方、意味、使い方を、例文の作成を通して確認する。

2 時間目 (10:40~11:50) 2

- ・読解演習：課題の読み物の意味を確認しつつ、そこに含まれている重要表現・文型を使って例文を作る練習をする。また、読み物の内容についての意見交換も時間の限り行う。読解練習で扱った記事は以下の通りである。
 - ・東京大学 AIKOM 日本語プログラム 近藤安月子・丸山千歌『上級日本語教科書 文化へのまなざし』(東京大学出版会)から一部
 - ・河竹登志夫『歌舞伎—その美と歴史—』(国立劇場)から一部₃
 - ・東浩紀「人文系が語るネット」(it.nikkei.co.jp)
 - ・宮台真司「『どう生きるのか』という本当の問いに向き合うとき」(神保哲生、宮台

真司、小出裕章、河野太郎、飯田哲也、片田敏孝、立石雅昭『地震と原発 今からの危機』（扶桑社）所収）から一部

- ・吉見俊哉、テッサ・モーリス・スズキ『天皇とアメリカ』（集英社）から一部
- ・栗山茂久、北沢一利『近代日本の身体感覚』（青弓社）から一部

3 時間目（12:00～12:30）

- ・待遇表現：上述の『待遇表現』テキストを用いた待遇表現の練習と、梁晶子・大木理恵・小松由佳『日本語 Eメールの書き方 Writing E-mails in Japanese』（The Japan Times）を用いた電子メールの書き方の練習。

4 時間目（13:30～14:20）

- ・月曜～水曜：1日1人が順番に担当する討議責任者の決めた話題について、クラスで討論を行う。責任者は討論のための資料を準備して自分の見解を発表し（5～10分程度のスピーチ）、討論を主導する。討論の話題は責任者が自分の専門に基づいて決定するが、責任者は専門分野の異なる他の学生と問題意識が共有できるように留意する。
- ・木曜：語彙・表現・漢字の時間。その週に授業や日常生活で接した「気になる単語・表現」を報告し、使い方を学ぶ。
- ・金曜：校外学習。ただし、最後の金曜日は通常授業（試験と口頭発表会のための準備）。

4-3 他5クラスの概略

本節では、夏海クラスに次いで二番目に高いレベルの夏草クラス以下、レベル順に各クラスの概略を述べる。

「夏草」

夏海クラスよりもやや読解力と会話力が低い学生を集めたクラス。読解力を鍛えることはもちろん、アカデミックな議論の際どうすれば「適切」に発言できるか、つまり、いかにすれば同席者に失礼のないように自己主張や質問、あるいは反論を行うことができるかに焦点を当てて会話能力の向上を図った。時間割と授業活動は夏海クラスに準じるが、以下に示す通り、読解の授業で使用した教材は異なる。

- ・東京大学 AIKOM 日本語プログラム 近藤安月子・丸山千歌『上級日本語教科書 文化へのまなざし』（東京大学出版会）から一部
- ・国会事故調（東京電力福島原子力発電所事故調査委員会）「調査報告書ダイジェスト版」から一部
- ・宮台真司「『どう生きるのか』という本当の問いに向き合うとき」（神保哲生、宮台真司、小出裕章、河野太郎、飯田哲也、片田敏孝、立石雅昭『地震と原発 今からの危

機』(扶桑社)所収)から一部

・東浩紀「人文系が語るネット」(it.nikkei.co.jp)

「夏柳」

会話力に比して読解力が高い傾向のある学生を集めた。会話に慣れ、また語彙力・表現力を高めることによって自分の意見を言えるようにする、読解の際には細部にこだわりすぎずに筆者の中心的主張が掴めるようにすることを目標とした。

夏海、夏草の両クラスでは文法だけを扱う時間は設けなかった⁴⁾のに対し、夏柳クラスとそれ以下のレベルでは文法の授業を設けた。夏柳クラスでは読解教材に含まれる重要文型の例文作りを宿題として課し、授業でそれに対するフィードバックを行った。

読解教材としては上述の『文化へのまなざし』を扱ったほか、学生各自がクラスで読む資料を探して選び、選んだ学生がそれを教材として授業を主導する「学生先生」活動を行った。「先生」を担当する学生は、教材を理解するために必要な背景知識の事前説明を授業の前日に行い、授業では他の学生が教材をきちんと読めているかどうか確認し、理解が不正確であればそれを訂正した。そして、内容に関するクラス討論を主導した。

「夏山」

今夏期コースの担任団は、夏柳クラスと夏山クラスとの間で学生の会話能力と読解能力について大きな差があったという印象を持っている。初級・中級文法の定着に疑問があり、日常的なやりとりはできても込み入った意見をまとめて述べることは困難。読むのが遅く、難読箇所があるとつい英語に翻訳して理解しようとしてしまう。夏山クラスにはこのような傾向を持つ学生が多かった。授業では、自分の意見や読解教材の内容を分かりやすく丁寧に、そして文法的に正確に話せるようになることを目指した。

文法の教科書としては、初級文法の解説と練習問題を簡略にまとめた夏期コース独自の冊子を用いた。また、年間コースで用いている『接続表現』(IUC 独自教材)も一部活用した。

読解教材はアカデミックジャパニーズ研究会編著『大学・大学院留学生の日本語③論文読解編』(アルク)や『文化へのまなざし』等の市販教科書をはじめ、雑誌・書籍から抜粋した生教材も用いた。

「夏鳥」

夏鳥クラスの学生の能力は総じて初級修了から中級初期程度といえるが、例年、このクラスには既習の学習内容を忘れてしまっている、あるいは頭では理解していても会話や作文で正しく使えない、という学生が集まる傾向がある。今年の場合もその例に漏れなかった。そこで授業では発音と初級文法、そして基本的な語彙・表現をしっかりと定着させ、

今後の日本語上達のための礎を築くことを目指し、読解授業での資料の音読や文法練習の際の例文の唱和など、いわゆる「退屈」な活動も積極的に採用した。

しかし、今年の夏鳥クラスは学生の学習スタイルや能力の特徴がまちまちであり、授業活動の設計には非常に苦勞をした。例えば、過去に一定期間日本に滞在した経験があり、日常会話のやりとりは何とかこなせるが、基本文法の理解が不正確で、誤用の化石化が見受けられる学生がいる一方、読解力と文法の知識は他のクラスメートより優れているもの、緊張しがちで、話をするのが極端に苦手な学生が存在した。

文法のテキストとしては、夏山クラスと同じく夏期コース独自の初級文法教科書を用いた。読解の授業では、岡まゆみ・筒井通雄・近藤純子・江森祥子・花井善朗・石川智『コンテンツとマルチメディアで学ぶ日本語 上級へのとびら』（くろしお出版）、『留学生の日本語③』のほか、新聞記事や小説などの生教材も用いた。

「夏空」

4-2の冒頭で述べた、最も下目のクラスが夏空クラスである。学生の会話力の弱さと初級文法の定着不足は夏鳥クラスに比しても顕著であり、ともかくも基本文法を用いた単文が正確に産出できるようにすることを最大の目標とせざるを得ない。しかし、大学院生として日本語の難しい文章を何とか読めるようになりたい、それについて自分の意見を言いたい、という、彼らの現時点での能力を大きく上回る望みにも可能な限り応えるべく授業は計画された。

文法の授業のためには既に触れた夏期コース独自の冊子、読解の授業のためには日本語能力試験 N1 の過去問題集を主に用いたが、コース後半には各学生に自分の専門や興味に従って読み物を選ばせ、授業で扱う教材とした。とはいっても夏柳クラスの「学生先生」活動とは違い、授業を主導したのはあくまでも教員である。学生は予習に何時間もかけたのに一日の授業で数行しか読み進められず悔し涙、教員は教員で単語リストと予習シート作りに追われる毎日であったが、強い達成感がもたらされたようだ。

4-3 個人授業

個人授業は、クラス担任が学生と1対1で接し、学生の個別のニーズに合わせた活動を行う目的で設置したものである。時間はコース全体で学生1人あたり1時間を確保した。クラスの日々の時間割の中にどのようにこの時間を組み込むかは担任に一任したが、1時間を数回に分け、2~3週間に一回程度の頻度で個人面談スケジュールを組むクラスが多かった。

この時間を何の目的に使うかはクラスによって異なるが、例えば期末発表会の原稿チェックならびに発表リハーサルや、クラス授業とは別の読み物を学生自身が探して読む「ミニ・プロジェクトワーク」等の活動が行われた。

5 受講者によるコース評価

今年度受講者のアンケートからは、彼らの高い満足度が伺える。35名の回答者のうち、コースの4段階評価を Excellent とした者は22名、Good とした者は10名、Fair とした者は3名、そして Poor とした者はゼロであった。また、33名が本コースを他の学生に推薦する意志を表明している。

Excellent あるいは Good を選んだ学生の多くは、絶えず発言が求められ緊張感のある授業活動と、スピーチや作文の作成、読解教材の下読み等の大量の宿題を課すカリキュラムを“challenging”と評価している。また、教員の“dedication”と“talent”を特筆する者も多く、クラスでの円滑で活発な議論を促す能力や、学生の誤用を訂正する際に威圧的にならず、発話への意欲を損なわない能力、あるいはクラス全体の雰囲気を協力的に保つラポール醸成能力をその理由として挙げている。

一方、Fair を選んだ三名の学生は、待遇表現のドリル的練習や文法練習の際の単文の唱和、あるいは読解教材の音読といった活動を“challenging”ではないとして低く評価している。

これらの「悪い」評価は、本コースが抱える教育活動上の困難を端的に表現しているといえよう。それは、学生自身がやりたいと思っている活動と、教員側が有益と考える活動の乖離である。この問題は特に夏山、夏鳥、夏空の3レベル、つまり基礎学習項目の復習と定着が重要な課題となるクラスにおいて顕在化しやすい。確かにドリルや音読はコミュニケーション活動ではないし、既習項目の復習も多く含むので、学生からすれば物足りなく感じるのかもしれないが、日本語能力の基礎を構築する、あるいは建て直すためには避けて通れない練習でもある。

学生は、たとえ現時点での日本語能力が低くとも、万難を排して確保した7週間という貴重な期間の中で何とか難しい物が読めるようになりたい、そして自由に話し議論できるようになりたい、という強い希望を抱いて本コースに参加する。これは高度な日本語能力をキャリア形成のために必要としているからこそその切実な要求である。一方、たとえば氷の上をまっすぐに滑ることさえできないスケーターに回転ジャンプを飛ばせることが無謀であるように、基本的な単文さえ正しく産出できない学習者に大学のゼミナールのような活動を求めても、それが彼らの日本語力向上に寄与することは困難である。

学生の真摯な要望をいかに尊重し、なおかつ実質的に彼らにとって有益な活動に導いていけるか。教員によるクラス運営の舵取りは今後も試行錯誤を続けなければならない。

なお、校外学習については、ほとんどの学生が有益であったと評価している（特に鎌倉は圓覚寺での座禅研修の人气が高い）が、それよりももっと勉強をしたかった、あるいは校外学習は自由参加制にして欲しかったと述べる学生もわずかながら存在する。

6 おわりに

コースを終え、学生と教員は大きな充実感を得た。しかし、中上級の学習者が日本語能力をさらに向上させるには、7週間という期間は短すぎることも認めないわけにはいかない。筆者は「7週間、とても勉強になった。しかし、もっと勉強が必要だと分かった。次はぜひ年間コースに参加したい」と学生がアンケートに書き残すことが夏期コースの最大の成功だと考えている。今年は十指に余る学生が年間コースへの入学希望を伝えてくれたが、嬉しい限りである。

今後、学生の高い挑戦意欲に応える密度の濃い教育と、それを支援する校外学習等の諸活動の充実を追求していく所存である。

(あきざわ ともたろう / 2010～2013 年度夏期コース主任)

注

- 1 ただし、年間コースで必須科目である S K I P (Special Kanji Intensive Program) は、夏期コースでは学生の自由選択制としている。
- 2 「夏海」クラスでは、読解演習により多くの時間を割くため、2時間目の授業時間を延長し、逆に3時間目(待遇表現)を短縮した。
- 3 歌舞伎鑑賞教室(校外学習②。稿末の資料参照)に対する関心と理解を深めるため、事前に読解の授業で扱った。
- 4 ただし、読解の授業において、教材に含まれる重要文型の運用練習を行ったので、コースを通じて授業で文法を全く扱わなかったわけではない。

資料：2013 年度夏期コース 校外学習等

6 月

- 20 (木) 所長より挨拶、クラス分け試験(筆記、聴解、発話) (9:40～12:00)
- 21 (金) オリエンテーションと緊急時避難訓練(9:40～12:30)、歓迎会(12:30～14:30)
- 28 (金) 校外学習① 臨済宗・圓覚寺派総本山 圓覚寺 座禅研修

7 月

- 5 (金) 校外学習② 歌舞伎鑑賞教室「芦屋道満大内鑑」

- 12 (金) 中間試験 (9:40~12:30)、校外学習③ 横浜の日① 3班に分かれ横浜市内を見学
A. 開港資料館と象の鼻テラス、B. 日本郵船歴史博物館と赤レンガ倉庫、C. 神奈川県立図書館
- 19 (金) 校外学習④ 横浜の日② 4班に分かれ横浜市内を見学
A. 日本新聞博物館・放送ライブラリー、B. 横浜地方裁判所、C. キリン横浜ビアビレッジ、D. 横浜美術館
- 27 (金) 校外学習⑤ 「東京の日」 3班に分かれ東京を見学
A. 国会議事堂 (参議院)、B. 東京国立博物館、C. 靖国神社・遊就館

8月

- 6 (月) 最終試験 (9:40~12:30) 午後は発表会準備
- 7 (火) 口頭発表会 (9:40~14:20)
1人あたり質疑応答を含め15分、関心・専門別に3箇所に分かれ同時開催
- 8 (水) クラス担任との個人面談 (9:40~12:30)、修了式と祝賀会 (12:30~14:30)